空から見た千里山キャンパス

――年史編纂室所蔵の航空写真から

橋寺知子

はじめに

年史編纂室にはさまざまな写真資料が残されている。周年記念の書籍や、関大通信、毎年発行されるハンドブックやパンフレットなど多くの刊行物のために撮影されたもの、学生たちの生活がよくわかるスナップ写真など、多岐にわたり、それぞれの時代の学園の様子や雰囲気が強く感じられる。

本稿では特に航空写真に注目する。広いキャンパス全体の様子を捉えるには、セスナ機からの一枚が有効で、入学時に配付される大学要覧や記念誌の巻頭には欠かせない。また航空写真は、キャンパスだけでなく、周辺の状況も記録されている。刊行物に掲載される際には、多くの場合、写真はトリミングされ、周辺の部分は切り捨てられて見ることができないが、年史編纂室に残る元の画像には、キャンパスを中心として比較的広い範囲が写っている。関西大学が千里山へ移ってきた大正時代、大学の周辺には竹林や田畑が広がっていたが、大学の発展・拡張と並行して、千里山も住宅地として開発が進んだことがよく分かる。

年史編纂室所蔵の航空写真で、戦前に撮影されたものは少ないが、数枚見つけることができた。創立七十年記念事業の一環として、校舎の建替えが進められていた昭和二十年代後半以降は、いろいろなアングルから撮影さ

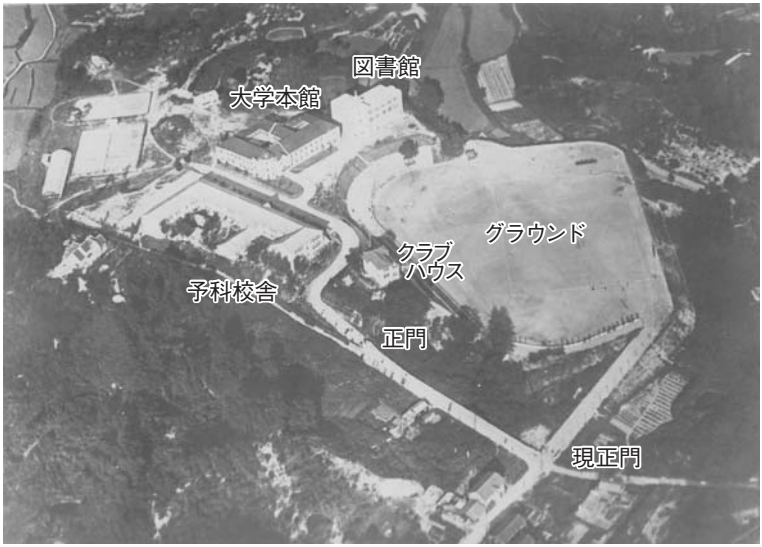

図1

れ、特に昭和三十年代以降、キャンパスだけでなく、周辺も劇的に変化していくことが分かる。今回は昭和初期から名神高速道路が開通した昭和三十九（一九六四）年頃までの八枚を取り上げ、キャンパスの建築物等の状況と大学周辺の敷地状況がいかに変化しているかに注目しつつ、それぞれの航空写真の解説を試みる。

戦前期の千里山学舎

大正十一（一九二二）年、関西大学は千里山へ学舎を建設し、大阪市内の福島から予科と本科が移転した。北大阪電鉄や事業を継続した新京阪電鉄の援助を受け、東洋一のグラウンドが整備され、昭和二（一九二七）年には住友合資会社の旧社屋を移築して大学本館とした。昭和三年には千里山キャンパス初の鉄筋コンクリート造で図書館が建設された。図1は、昭和初期のキャンパスの様子を写した一枚で、昭和九（一九三四）年の卒業アルバムに掲載されていたものである。

写真下方の交差点が現在の正門前だが、当時の正門はそこから北へ上った所に設けられていた。グラウンドの

図2

西側にはクラブハウス（一九二六年竣工）、予科校舎、大学本館があり、その隣には図書館が見える。北側（左上）にはテニスコートと馬場が設けられている。キャンパス周辺は田畑や自然のままの丘陵地が広がっている。その緑の中に、のちに昭和二十八（一九五三）年に買収され「西研究室」と呼ばれることになる洋風住宅がすでに見えている。

図2は、「昭和十六（一九四一）年撮影」とのメモが付されていた一枚である。西方から現・第一学舎方向を撮影している。画像はあまり鮮明ではないが、大学本館北側に、昭和の御大礼の響宴場の一部を下賜され昭和七（一九三二）年に建設された威徳館（武道場兼講堂）が見える。大学本館の手前にあるはずの予科校舎は昭和九（一九三四）年十二月に焼失し、空地になっている。写真右端下部に半分だけ写っている建物が、昭和十年春に予科仮校舎として建設された尚志館である。

図1では自然のままであったキャンパス西側は、所々に木々を残しながら、地面がむき出しになっている。

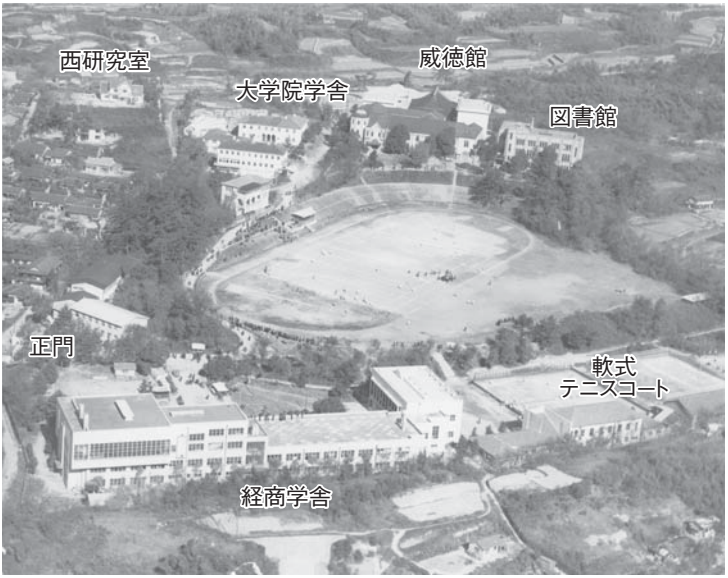

図3

法文学舎の新築（昭和二十年代後半）

図3は「昭和二十七（一九五二）年大学祭の折り」というメモが付された一枚である。南から法文学舎（現・第一学舎）方向を撮影している。写真下部左寄りの白い建物は、昭和十一（一九三六）年に建設された新予科校舎で、当時最先端のモダニズム風の建築であった。この写真が撮影された頃には、商学部・経済学部の学舎として使用されていた。消失した予科校舎の跡地には、大学院充実のため、昭和二十四（一九四九）年に大学院学舎、さらに二十七年には大学ホール、研究室、そして扇形の階段教室が、村野藤吾の設計により建設されている。

グラウンドの北側には、戦前と変わらず、大学本館と威徳館の大きな屋根が見えているが、威徳館両側に矩形の校舎が建設されている。昭和三十（一九五五）年の創立七十周年に向け、施設の充実のため、法文学舎の改築が二十六年夏から始まり、二十七年四月には一期工事が竣工した。この後、威徳館は解体される。

大学正門がこの写真の左下端部付近、現在の位置にな

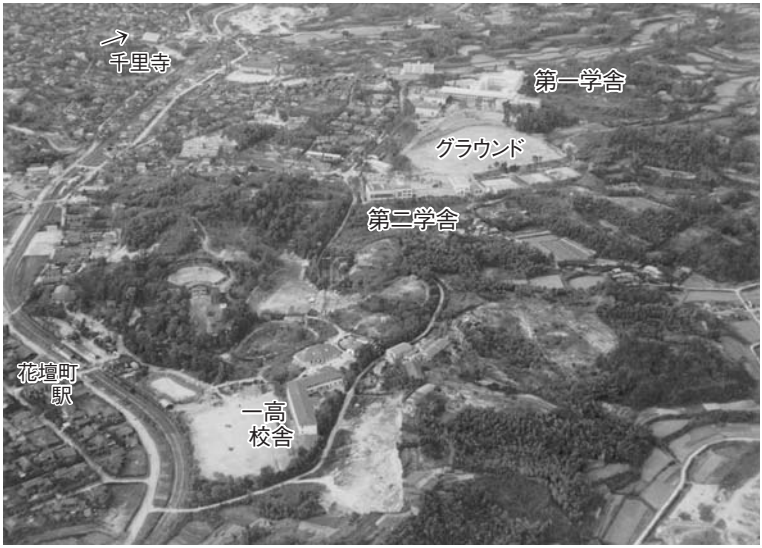

図4

ったのは昭和二十七（一九五二）年二月で、この写真では法文坂が新正門につながるよう整備されたのが見て取れる。

図4は、あまり鮮明な写真ではないが、昭和三十（一九五五）年秋、法文学舎の改築が完成した頃の写真と思われる。大学本館は解体され、村野藤吾設計の第一学舎の南側正面校舎（一号館）が完成している。校舎の新築工事と合わせて、グラウンドの北側の階段状の観客席の整備もなされた。この写真ではまだ工事中のように見える。コンクリートでできた階段状の観客席は、スポーツ観戦だけでなく、南向きで日当りもよく、授業の合間の憩いの場所にもなっていた。法文坂は、観客席の整備とともに拡幅されている。昭和三（一九二八）年建設の図書館の西端に円形の新しい図書館（現・簡文館）が新築され、第一学舎の右側に写っている。この位置は千里山キャンパスでは最も高い位置にあたり、ここから南方向を望むと、淀川や大阪の中心部まで見渡すことができた。

写真左上隅、住宅地の中に、ひときわ大きい白っぽい和風の屋根が見えている。威徳館の部材を使い新築され

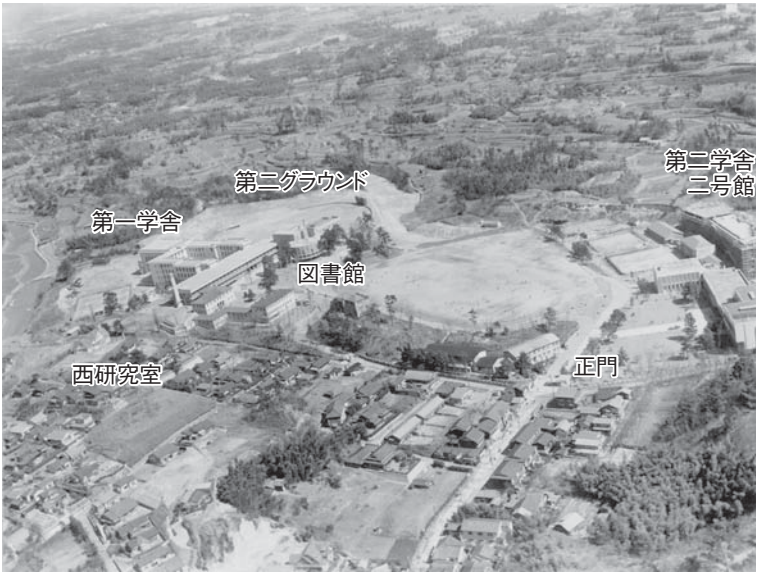

図5

た千里寺本堂である。

図5は、「昭和三十二（一九五七）年三月から十月の間に撮影されたもの」というメモが付された写真である。木々の様相からは、冬から早春に撮影されたものと思われる。第一学舎付近と正門の整備が完成している様子がわかる。第一学舎東側には、昭和三十一（一九五六）年に第二グラウンドが完成している。また写真右端に、第二学舎二号館の形が見えてきているが、まだ全体に足場がかけられており、建設途中のようである。

関大前通りは、住宅等の建ち並びがこの頃には見られるものの、まだ空地や田畑の名残が感じられる。通りの北側の住宅地には、全体に瓦葺きの和風住宅が多いが、第一学舎西側の西研究室や、写真下端中央部に、急勾配の明るい色合いの屋根がついた洋風住宅が見える。現・阪急千里線の千里山駅西側に広がる千里山住宅地は、千里山キャンパスの成立と同時期から郊外住宅地として開発が行われた。線路の東側でも、戦前から住宅地としての造成が徐々に始まり、関大前通りの北側においても、新しい時代に応じた「改良住宅」の懸賞コンペも企画さ

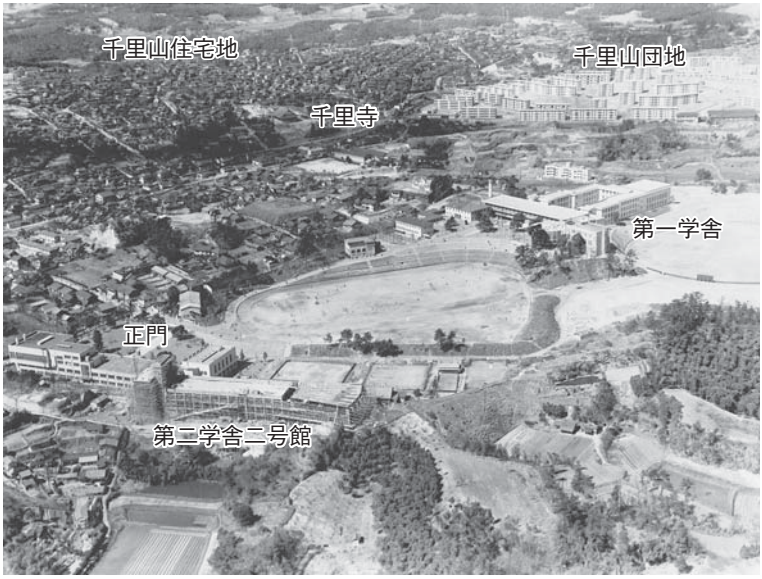

図6

れた。点在する洋館や折衷住宅は、その頃に建設されたものと考えられる。

図6も、図5と同時期の航空写真である。キャンパス南方から北西方向を撮影している。手前に見えるのが建設中の第二学舎二号館である。

この写真で目を引くのは、写真上方右側の千里山団地だろう。昭和三十一（一九五六）年に完成した日本住宅公団による当時最先端の住宅団地である。矩形の五階建ての住棟が輝いている。千里山キャンパスと同じく起伏のある敷地で、地形に合わせ、変化のある配置になっていた。千里山団地の西側は、前述の千里山住宅地である。東向きの日当りのよい丘陵地に家々が整然と建ち並んでいる。千里山駅西側の高台には千里寺が見えている。千里山住宅地と関西大学は、少し距離があることと、線路を挟んで西と東に分かれているため、直接的な関係はないものの、ともに月日を経て、時代に応じて成熟してきたことが読み取れる。

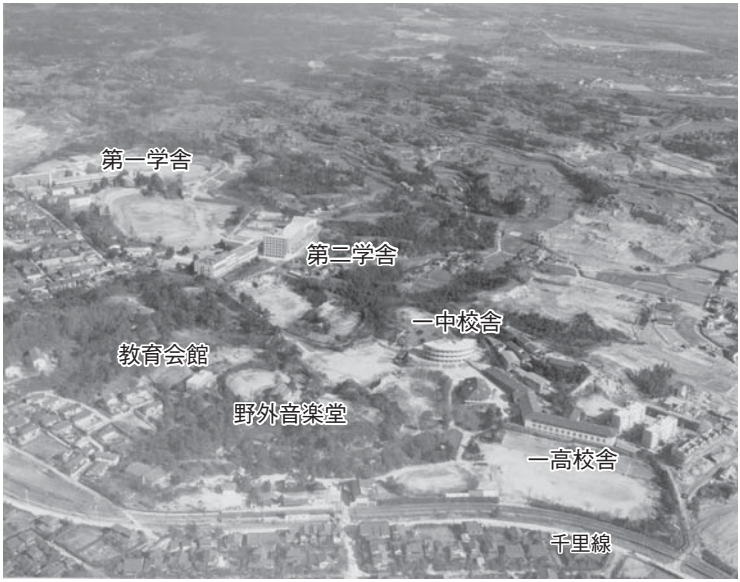

図7

名神高速道路の建設前後

図7は、昭和三十四（一九五九）年撮影というメモのある写真で、大学キャンパス内では第二学舎二号館が竣工し、写真下方には、第一高等学校の校舎群が建ち並ぶ。大学キャンパス南西側には、大正十（一九二一）年、千里山花壇として開園した千里山遊園があった。その跡地は大学の施設の充実のためには必須の用地であったので、取得に努力し、昭和二十五（一九五〇）年に売買契約を結び、以後、大学外苑と呼ばれた。第一高等学校は天六学舎でスタートしたが、昭和二十八（一九五三）年、千里山に校舎が建設された。昭和三十二（一九五七）年には一中の扇形校舎が完成した。外苑の整備は徐々に進められたようだ。この写真ではまだ千里山遊園の名残がかなり認められる。千里山遊園には飛行塔があったが、第二学舎の左側の小高い丘の上（現在の第三学舎の位置）に、その名残と思える工作物の跡がある。その丘から南へ下ると、半円形の観客席と野外音楽堂が見えている。その左側に矩形の教育会館（一九五六年竣工）が見えて

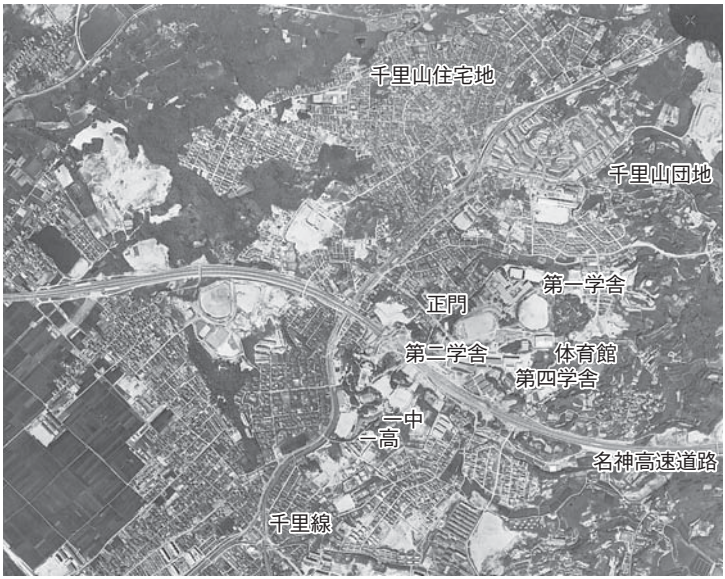

図8

いる。関大幼稚園は昭和二十六（一九五一）年四月に開園しているが、同年七月に元映画館だった建物を大改修して園舎とするまで、こどもたちは、この外苑跡でのびのび遊んでいたと言う。

図8は、五年後の昭和三十九（一九六四）年の航空写真である。かなり広域を捉えた写真だが、昭和三十八年、栗東－尼崎間が開通した名神高速道路が、Sの字型を描いて関西大学の敷地中央を通過している様子がはっきり見える。

図7の撮影から五年の間に、キャンパス内に多くの建物が建設されている。外苑の野外音楽堂跡にはプール、第一グラウンドの東側には体育館や誠之館、特別講堂（一九六二年竣工）、第四学舎一号館（一九六〇年竣工）と二号館の一部、専門図書館（一九六四年竣工）などが一気に建設され、現在のキャンパスにかなり近くなってきたことが分かる。外苑の中央に関西大学会館が建設されるのは昭和四十（一九六五）年で、創立八十周年事業の一環であった。この写真ではまだなく、その場所には緑が広がっている。

大学周囲の状況も激変している。図7では、周囲はまだまだ緑や田畑の方が多い印象だが、図8では、キャンパス東側には緑が残るものの、キャンパスは住宅地と一体化し、のどかな風景ではなくなっている。昭和三十九（一九六四）年は東京オリンピックが開かれた年で、戦後、最も劇的に日本の風景が変化した時期と言える。

おわりに

本稿では、昭和初期から戦後の日本の風景が大きく変わった昭和三十九（一九六四）年までのキャンパスと周辺環境の変化を、年史編纂室に所蔵されている八枚の航空写真から振り返った。たった八枚では断片的な記述となり、学園の歩みのすべてを見ることはできないが、キャンパスの全体像を捉えるには航空写真は有効な資料と言える。また周辺の状況が克明に分かり、時代背景と関西大学の歩みを考える上で、さまざまな示唆を与えてくれる。昭和三十年代の五年間で、キャンパスも周辺も大きく変わっていたことは、戦後の高度経済成長期の日本の状況を、体感できたように思う。

（はしてら　ともこ・関西大学環境都市工学部准教授）